

## 文法観の誕生—清代の満洲語文法書から—

竹越 孝 (神戸市外国語大学)

### 1. はじめに

中国の言語をめぐる記述は、(a) 中国語による中国語の記述、(b) 非中国語による中国語の記述、(c) 中国語による非中国語の記述、の三種類に大別することができる。(a) はいわゆる「小学」であり、漢代以降、音韻・文字・訓詁の各分野において膨大な蓄積があることは言うまでもない。(b) は一般的に「域外資料」と呼ばれるもので、敦煌出土の内陸アジア言語資料に始まり、明代以降の朝鮮資料、日本資料、琉球資料、西洋資料など、広範囲にわたる豊富な資料群を擁している。最後の (c) の代表的な資料群としては、仏典の翻訳事業に付随するサンスクリットの関係を除けば、元代以降の「訳語」類がこれに当たるであろう。具体的には、元代の『至元訳語』と明代以降の『華夷訳語』である。これらの資料群の構成は大略次のようになっている：

- 1) 『至元譯語』：雑字 (漢字音写+中国語訳)
- 2) 甲種本『華夷譯語』：雑字 (漢字音写+中国語訳)；来文 (漢字音写+中国語逐語訳+中国語総訳)
- 3) 乙種本『華夷譯語』：雑字 (文字+漢字音写+中国語訳)；来文 (文字+中国語総訳)
- 4) 丙種本『華夷譯語』：雑字 (漢字音写+中国語訳)

類書『事林廣記』所収の『至元訳語』(一名『蒙古訳語』)は、元の至元年間(1264-1274)に成立した中国語とモンゴル語の対訳語彙集で、中国語の語彙に対応する漢字音写モンゴル語が付される。甲種本『華夷訳語』は、明の洪武年間(1368-1398)に現行の『元朝秘史』とほぼ時を同じくして成立したモンゴル語・中国語の対訳教材で、『至元訳語』と同様の体裁を持つ「雑字」部分と、漢字音写モンゴル語で記された詔勅類に中国語の逐語訳(傍訳)と大意訳(総訳)を付した「来文」部分からなる。乙種本『華夷訳語』は明の永楽年間(1403-1424)設置の四夷館で編纂された対訳教材であり<sup>1</sup>、「雑字」・「来文」とも、原語の文字を記載する点が特徴である。最後の丙種本『華夷訳語』は、明の弘治年間(1488-1505)設置の会同館で編纂された対訳語彙集であり<sup>2</sup>、その体裁は『至元訳語』と同様である。

以上の「訳語」類における記述は、「雑字」すなわち語彙と、「来文」すなわち例文を主な内容とする。漢字音写が実質的に音韻の領域を担うものだとすれば、明代以前の中国語による非中国

<sup>1</sup> 四夷館は外交文書の翻訳を担当する部署。現存する訳語は女真、韃靼、高昌、暹羅、百夷、八百、緬甸、西番、西天、回回の10種に及ぶ。

<sup>2</sup> 会同館は外交使節の接待を担当する部署。現存する訳語は日本、琉球、朝鮮、女真、韃靼、畏兀兒、安南、暹羅、百夷、占城、滿刺加、西番、回回の13種。なお、この他故宮博物院には別系統の36種が所蔵されており、これは「丁種本」と呼ばれる。その体裁は乙種本の雑字に等しい。

語の記述は、文字、音韻、語彙及び例文のレベルにとどまり、「文法」が欠けている。

近代以前の中国文化圏において、非中国語の文法を体系的に記述した資料として、清代に刊行された一群の満洲語文法書類を挙げるができる。これは、北京への遷都 (1644) 以後、急速に漢化し母語である満洲語を忘れていった満洲旗人のために出版された、中国語による満洲語学習書の一部をなすものである。管見の限り、現存する満洲語文法書は 10 種に及ぶ<sup>3</sup>：

- ①『清書指南』卷三「翻清虚字講約」康熙 21 年 (1682) 識
- ②『滿漢類書』卷三十二「字尾類」康熙 39 年 (1700) 序
- ③『清文備考』卷一「虚字講約」康熙 61 年 (1722) 序
- ④『滿漢字清文啓蒙』卷三「清文助語虚字」雍正 8 年 (1730) 序
- ⑤『清語易言』乾隆 31 年 (1766) 序
- ⑥『三合便覽』卷首「清文指要」乾隆 45 年 (1780) 序
- ⑦『蒙文晰義』卷三「蒙文法程」道光 28 年 (1848) 序<sup>4</sup>
- ⑧『清文接字』同治 5 年 (1866) 跋
- ⑨『字法舉一歌』光緒 11 年 (1885) 序
- ⑩『重刻清文虚字指南編』光緒 20 年 (1894) 序

本稿では、最初期における満洲語の体系的な文法記述を反映する文献として、①『清書指南・翻清虚字講約』及び④『滿漢字清文啓蒙・清文助語虚字』を取り上げ、この二書がどのように満洲語の文法を記述しているか、またそこにはどのような文法観が反映されているか、という問題を検討する。なお、以下における満洲語のローマ字転写は原則として Möllendorff (1892) の方式により、例文の出典表示においては①を「翻」、④を「助」として示す。

## 2. 二書の概要

### 2.1. 『清書指南・翻清虚字講約』

『清書指南』(manju bithei jy nan) 三巻は清・沈啓亮 (字は弘照、1645-1693) の著、巻尾に康熙 21 年 (1682) の自叙がある。本書の概略と著者については、今西春秋 (1956)、池上二良 (1962)、早田・寺村 (2004) 等が詳しい。天理大学附属天理図書館に所蔵される刊本は、同著者による『大清全書』(daicing gurun i yooni bithe) 十四巻<sup>5</sup>の付録として収められている。本稿の記述は天理図書館蔵本のマイクロフィルム (雄松堂 1966) による。

『清書指南』は、巻首「十二字頭」、「註義徳喜烏朱」、巻二「満洲雑話」、巻三「翻清虚字講約」よりなる。「十二字頭」は満洲文字の音節表、「註義徳喜烏朱」は 40 条の満洲語短文に注解を施

<sup>3</sup> 清代に出版された満洲語学習書の全般については拙稿 (2011) を参照。以下は池上二良 (1955)、山本謙吾 (1955) によりリストアップしたものである。一次資料の所在については遠藤・竹越主編 (2011) の「満蒙漢資料」を参照、ただしなお遺漏が多いものと思われる。

<sup>4</sup> 同編は満洲語・モンゴル語・中国語の三言語対訳である。

<sup>5</sup> 早田・寺村 (2004) によれば、天理図書館には康熙 22 年 (1683) 京都西河沿宛羽齋李伯龍書坊刊本と康熙 52 年 (1713) 京都西河沿尊古堂書坊刊本が所蔵され、後者に『清書指南』が付されているという。

したもの、「滿洲雜話」は滿洲語の会話を収める。

『清書指南』の卷三をなす「翻清虚字講約」(bithe ubaliyambure. be. de i hergen be giyangnara oyonggo) は全 14 丁、その内容は 67 種の「虚字」を解説したものである<sup>6</sup>。なお、上の滿洲語文法書リストで③とした『清文備考・虚字講約』は本編を引き写したものである。

「翻清虚字講約」において取り上げられている項目は以下の通りである：

[1] be; [2] de; [3] i, ni; [4] ra, re, ro; [5] la, le, lo; [6] ka, ha, ke, he, ko, ho; [7] me; [8] fi; [9] pi; [10] bi; [11] bifi, bici, bisire; [12] bihe; [13] bihe bici; [14] bihebi; [15] ombi; [16] mbi; [17] o; [18] ume; [19] ci; [20] se; [21] ki; [22] kini; [23] bu; [24] mbu; [25] so, su, cina, fu, nu; [26] ša, še, ja, je, šo; [27] kiya, hiya, kiye, hiye; [28] ca, ce, du, nu, cu, ne; [29] ungg, tuwanggi, bonggi, gonggi; [30] manggi; [31] ohode; [32] jakade; [33] na, ne, ji; [34] reo; [35] mbio, bio, kao, hao, keo, heo, nio; [36] rangge, rengge, rongge, kangge, hangge, hūngge, kengge, hengge; [37] rakū, kakū, hakū, kekū, hekū; [38] rahū, ayoo; [39] sa; [40] te; [41] da; [42] kai; [43] ken, kan, hei, hai, hoi, pi, kon; [44] aikabade; [45] udu seme, udu bicibe, udu cibe; [46] hono bade; [47] tere anggala; [48] tere dade; [49] dere; [50] dabala, gojime; [51] nememe; [52] tala, tele, tolo; [53] gala, gele; [54] ,maka; [55] aika; [56] aise; [57] mene; [58] jaci; [59] eitereci; [60] tetendere; [61] ere; [62] ainci; [63] eici; [64] cuka, cuke; [65] uttu; [66] tuttu; [67] esi.

各項目は滿洲語の意味・用法及び綴字法に関する解説と例文から構成される。対格語尾 be (～を) の項目を引くと以下の通りである。なお滿洲語の日本語訳は〔 〕内に示す：

(1) be. 虚字解。即漢文將字。把字。實字解。我等。雀食。餌軌。如云。把此物如何。即云。ere jaka be. [この物を] 將此人如何。即云。ere niyalma be. [この人を] 如接虚語用。凡已然者。即用 ka. ha. ke. he. ko. ho. 字。方可接 be 字。未然者。即用 ra. re. ro. ru. 字。方可接 be 字。其 i. ni. fi. de. ci. 等類字。俱不可接 be 字。若係整語。如 bayan wesihun [富貴] 之類。即可直用 be 字。亦有連寫者。必用 m 字帶下。如 gisumbe. [話を] cembe [彼らを] 之類。亦有因上一字。係 a. e. i 頭者。如 imbe. [彼を] mimbe. [私を] simbe. [君を] membe [私達を] 之類。方可用也。又有整語。如勤曰 kicebe. [勤勉な] 精細人曰 serebe. [細かい人] 總之曰 eicibe. [ぜひと] 那箇曰 yabe. [何を] 好了曰 yebe. [良い] 不在此例。凡 dahame [なので] 之上。必用 be 字。如云。你們既到我家裡來了。suwe meni boode emgeri jihe be dahame.. [私達は君の家にもう来たので] 凡書法。不可以 be 字。提寫一行之首。至於 de. ci. se. i. ni. kai. 等字亦然。凡此等字。用於連字之頭者。名曰整字。或有用於中。或有用於尾。及單用者。方爲虚字解耳。(翻 1a3-1b4)

上では、まず「虚字解」すなわち虚詞としての意味と、「實字解」すなわち実詞としての意味

<sup>6</sup> 本編については、拙著 (2007) に全文の翻字と翻訳を収録している。

が記され、「如云」以下に例が挙げられる。その後は例を引きながら綴字法や連語法<sup>7</sup>についての解説が続くが、全体的に記述はあまり整理されていない。

## 2.2. 『清文啓蒙・清文助語虚字』

『滿漢字清文啓蒙』(manju nikan hergen i cing wen ki meng bithe; 以下『清文啓蒙』)は清・舞格(字は寿平、生卒年未詳)の著、清代において最も盛行した満洲語学習書であり、それは同類の書物の中で現存する版本の数が最も多いことから窺える<sup>8</sup>。最も流通している版本である三槐堂刊本(後述の第 I 類に属する)によると、その構成は以下の通りである: 卷一「満洲十二字頭單字聯字指南」、「切韻清字」、「満洲外單字」、「満洲外聯字」、「清字切韻法」、「異施清字」、「清書運筆先後」; 卷二「兼漢滿洲套話」; 卷三「清文助語虚字」; 卷四「清字辨似」、「清語解似」。これによれば、卷一は満洲文字とその発音方法についての解説、卷二は満洲語と中国語の対訳による会話篇、卷三は満洲語の機能語についての解説、卷四は字形の類似した語及び類義語についての解説である。

池上二良(1962)によると、『清文啓蒙』の版本は、卷一における注音の方式が反切によるか三合切音<sup>9</sup>によるかをめぐって、以下の三系統に分かれるという:

- I 類: 四卷本。三合切韻なし。雍正刊本の系統。
- II 類: 四卷本。三合切韻あり。乾隆刊本の系統。
- III 類: 一卷本。「兼漢滿洲套話」のみからなる。

以上のうち、卷二である「兼漢滿洲套話」については、同じく第 I 類に属する版本であっても、少なくとも二種類の系統を想定しなければならないことは拙稿(2013)に述べた通りであるが、卷三及び卷四については現存する諸版本間にはほぼ異同はない。本稿の記述は上の第 I 類に属する三槐堂刊本(天理図書館蔵本のマイクロフィルム、雄松堂 1966)による。

『清文啓蒙』の卷三をなす「清文助語虚字」(manju bithei gisun de aisilara muden i hergen)は全 60 丁、満洲語の「助語虚字」即ち機能語 99 種についての解説と、常用フレーズ 154 種の中国語訳からなる<sup>10</sup>。取り上げられる項目は以下の通り:

- [1] de; [2] deo; [3] be; [4] beo; [5] i; [6] ni; [7] nio; [8] ga, go, ge; [9] ningge, ingge; [10] kai;

<sup>7</sup> 当該の単語が慣用的にどういった語と結びつくか、あるいはどういった語に呼応して用いられるか、といった広義のコロケーションに属する問題を、ここでは連語法と呼ぶ。

<sup>8</sup> 『滿漢字清文啓蒙』の現存する版本については、池上二良(1962)及び拙稿(2013)を参照。一次資料の所在については遠藤・竹越主編(2011)の「満蒙漢資料」を参照、ただしなお遺漏が多いものと思われる。

<sup>9</sup> 三合切音は、満洲語の一音節を最大三字の漢字の組み合わせによって表す、乾隆期(1736-1795)に盛行した注音の方式。「三合切音」の仕組みとその中国語音韻史における意義については、落合守和(1984)等を参照。

<sup>10</sup> 『清文啓蒙』の英訳である Wylie(1855)ではそれぞれ 100 種、154 種とする。本編については、拙著(2007)に全文の翻字と翻訳を収録している。

[11] me; [12] ki; [13] ci; [14] deri; [15] aikabade; [16] aika; [17] fi; [18] ofi; [19] pi; [20] ka, ha, ko, ho, ke, he; [21] kao, hao, koo, hoo, keo, heo; [22] kangge, hangge, kongge, hongge, kengge, hengge; [23] kanggeo, hanggeo, konggeo, honggeo, kenggeo, henggeo; [24] bi; [25] kabi, habi, kobi, hobi, kebi, hebi; [26] ra, re, ro; [27] reo, roo; [28] range, rengge, rongge; [29] ranggeo, renggeo, ronggeo; [30] mbi; [31] mbio, bio; [32] rakū; [33] rakūn; [34] rakūngge; [35] rakūnggeo; [36] kakū, hakū, kekū, hekū; [37] kakūn, hakūn, kekūn, hekūn; [38] kakūngge, hakūngge, kekūngge, hekūngge; [39] kakūnggeo, hakūnggeo, kekūnggeo, hekūnggeo; [40] gala, gele; [41] doigunde; [42] onggolo; [43] na, ne, no, ya; [44] kini; [45] cina; [46] nu, so, su, fu; [47] ju; [48] sa, se, si, ta, te; [49] hori, hūri, huri; [50] la, le; [51] ta, te, to; [52] mudan, mari; [53] dari; [54] geri; [55] tome; [56] jiya, jiye; [57] hai, hoi, hei; [58] hai, tai, tei; [59] bai; [60] baibi; [61] cun; [62] hon, hūn, hun; [63] cibe; [64] udu; [65] gojime; [66] eitereme; [67] eiterecibe; [68] tala, tele, tolo; [69] rahū, ayoo; [70] kan, kon, ken, si, liyan, shūn, shun; [71] jaka, saka; [72] ungg, bonggi, gonggi, tuwanggi; [73] be dahame; [74] tetendere; [75] manggi; [76] nakū; [77] cuka, cuke; [78] cukangga, cukengge; [79] teile; [80] ebsihe; [81] dule; [82] ainci; [83] aise; [84] dere; [85] dabala; [86] wajiha; [87] hono; [88] bade; [89] ai hendure; [90] anggala; [91] tere anggala; [92] sere anggala; [93] na, ne, no; [94] ji; [95] nu, du, ca, ce, co; [96] bu; [97] ša, še, šo, mi, ce, ja, je, jo; [98] ša, še, ta, da, te, de, do, tu, la, le, lo, mi, je, ra, re, ro, niye, kiya, giya, kiye, hiya, hiye; [99] je, jo.

各項目は「翻清虚字講約」と同様、意味・用法・綴字法等に関する解説と例文からなるが、関連する表現を各項目末尾に挙げる点と、例文の当該語彙使用箇所にも中国語の傍訳を付している点が異なる。対格語尾 **be** の項目を引くと以下の通り。傍訳の付された箇所には下線を引き、直後の [ ] 内に傍訳の内容を記す：

(2) **be**. 把字。将字。也字。又以字。用字。又使字。令字。教字。聯用單用俱可。實解我們。魚食。鳥食。牛車轆頭橫木。如云。terebe [把字] gaifi gene. [それを持って行け] 将他領了去。tere be [將字] gaju. [それを持って来い] 把那个拿来。siyang serengge ujire be [也字]. hiyoo serengge tacibure be [也字]. sioi serengge gabtabure be [也字]. [庠とは養うことである、校とは教えることである、序とは射ることである] 庠者養也。校者教也。序者射也。ai be [以字] fulehe da obumbi. [何を根本とする] 以何作根本。aibe [用字] temgetu obumbi. [何を根拠とする] 以何為憑據。sefu simbe [令字] gene sehe. [先生はお前に行けと言った] 師傅說了教你去。imbe [使字] jikini. [彼を来させたらいい] 教他来罷。

凡遇 ai hendure. [何を言う] dahame [なので] 等虚字之上。必用 **be** 字。凡如 i. ni. de. me. ci. fi 等虚字之下。不可用 **be** 字。

mimbe [私を] 把我。教我。membe [私達を] 将我們。令我們。

suwembe [君達を] 把你們。教你們。cembe [彼らを] 将他們。使他們。

sehebe [言ったことを] 将說了的。henduhe be [話したことを] 把說了的。之謂也。(助

6a3-7a2)

上では、まず中国語訳があり、「聯用」・「單用」といった綴字法上の約束が記された後<sup>11</sup>、「實解」として実詞としての意味が述べられる。「如云」以降に例文が挙げられ、連語法の解説があった後に関連表現が来るという形を取る。

### 2.3. 二書の継承関係

『清書指南・翻清虚字講約』において立項される項目は、すべて『清文啓蒙・清文助語虚字』においても立項されている。また、二書は後に見るように意味や用法の記述において一定の共通性があり、後者が前者の記述を参照したであろうことはほぼ疑いないと思われる。ただし、後者の方が項目数を増やし、かつ細分化していること、各項目に挙げられる例文はほとんど一致せず、後者には口語的な例文が多いこと、前者の記述はあまり整理されていないが、後者は意味－綴字法－例文－用法－関連表現という一貫したスタイルで記述されること、といった点は異なっており、総じて後者の方が教科書として整った形式を持つと言える。「清文助語虚字」の著者舞格は、「翻清虚字講約」を下敷にしつつも、より実用的な体裁に改めるという目的でそれに大幅な改訂と増補を施したものと考えられる。

以下では、『清書指南・翻清虚字講約』と『清文啓蒙・清文助語虚字』における満洲語の文法記述の特徴として、(A) 文法的意味の記述が見られること、(B) 例示に一定の体系性が認められること、(C) 中国語訳が直訳的であること、の三点を挙げる。(A) は二書に共通する特徴であり、(B) (C) は主に「清文助語虚字」に見られる特徴である。

## 3. 文法的意味の記述

### 3.1. 名詞格語尾

満洲語における接辞は、名詞格語尾、動詞活用語尾、語幹形成接尾辞の三類に大別されるが、そのうち名詞格語尾と動詞活用語尾では、記述の態度に相違が認められる。

満洲語の格は、主格 (Nominative)、属格 (Genitive)、具格 (Instrumental)、対格 (Accusative)、与位格 (Dative-Locative)、奪格 (Ablative)、沿格 (Prolative) に分かれる。『清書指南・翻清虚字講約』と『清文啓蒙・清文助語虚字』の二書における、主格以外の格語尾に対する解説を摘記すると以下の通り<sup>12</sup>：

a) 属格/具格：所有者 [～の] /手段 [～でもって]

(3) i. ni：即漢文以字。之字。(翻 2a5)

(4) i：的字。之字。又以字。用字。(助 7a5) ni：的字。之字。又以字。用字。(助 8a5)

b) 対格：対象 [～を]

<sup>11</sup> 「聯用」は一単語内で合わせて綴ること、「單用」は前の単語と分けて綴ることを表す。

<sup>12</sup> 以下の文法用語と日本語訳は津曲敏郎 (2002) に基づく。なお、主格はゼロ語尾のため解説がない。

- (5) be : 虚字解。即漢文將字。把字。(翻 1a3)
- (6) be : 把字。將字。也字。又以字。用字。又使字。令字。教字。(助 6a3)
- c) 与位格 : 受け手・方向 [~に]、場所 [~で]
- (7) de : 直就某事某物上説也。作於字意。作處字意。作時候字意。作地方字意。作在字意。作而字意。(翻 1b5)
- (8) de : 時候字。又地方字。處字。往字。又給字。與字。又裡頭字。上頭字。在字。於字。乃轉下申明語。(助 1a5-6)
- d) 奪格 : 出发点 [~から]、比較 [~より]
- (9) ci : 漢文由字。自字。從字。比字。(翻 6a6)
- (10) ci : …又自字。從字。由字。…又離字。又比字。(助 13a5)
- e) 沿格 : 通過点 [~に沿って、~を通過して]
- (11) deri : 自字。從字。由字。…比 ci 字詞義實在。(助 15b6)

上によると、名詞格語尾に対する記述は二書とも概して簡略なものであり、「~字」あるいは「~字意」として、相当する中国語（多くは前置詞）のみが示されている。

### 3.2. 動詞活用語尾

これに対して、動詞活用語尾に関する記述は詳細であり、中国語訳ではなくその文法的意味 (grammatical meaning) を記述する傾向が見られる。満洲語の動詞活用語尾は希求法、終止法、連体法、連用法に分かれるが<sup>13</sup>、そのうちテンス・アスペクトに関わる語尾に対する記述は以下の通り。なお、文法的意味と考えられる部分には下線を施す：

- a) 終止法現在形 : 現在の動作・状態 [~する、~している]
- (12) mbi : 是漢文未然之詞。結煞語。(翻 5b2)
- (13) mbi : 乃將然未然。煞尾之語。比 ra. re. ro 等字。詞義實在。(助 25a1)
- b) 終止法完了形 : 過去の出来事の説明 [~したのだ]、結果の残存 [~してある]
- (14) 至於 habi. hebi. hobi. 此用 bi 字煞脚者。乃一事之已完也。(翻 3a6)
- (15) kabi. habi. kobi. hobi. kebi. hebi : 已了字。矣字。也字。乃一事已畢。用此煞尾。另敘別情。已然之語。(助 21a5-6)
- c) 連体法未来形 : 未来の動作 [~する (こと/だろう)]
- (16) ra. re. ro : 此三字。用於字末。皆承上接下。將然未然之語。(翻 2b2)
- (17) ra. re. ro : 乃上接下。未然之語。亦可煞尾用。比 mbi 字。語氣輕活。句中亦有解作之字。的字者。(助 22a5-6)

<sup>13</sup> 「法」という総称については、津曲敏郎 (2002 : 52) における次の記述を参照 : 「特に 4 つに大別した活用形を「一法」と総称するのは、一般に文法でいう法 (陳述に対する話者の心的態度の文法的区別) とかかわる点もあるが、それとは異なる観点も含めた、多分に便宜的な呼び方であることをことわっておく (具体的な個々の活用形の名称である「一形」と区別するため)。」

d) 連体法過去形：過去の動作 [～した (こと)]

(18) ka. ha. ko. ho. ke. he : 此六字。皆已然之詞。漢文矣字。也字。(翻 3a3)

(19) ka. ha. ko. ho. ke. he : 了字。矣字。也字。在字尾聯用。乃已然之詞。句中亦有解作之字。的字者。(助 18a3)

e) 連用法不定形：同時並行的な動作 [～し (ながら)]、目的 [～しに、～するには]

(20) me : 乃承上接下。連一事而急轉之詞。…又如漢文平叙口吻。如着字之虛字眼。乃一句中之過文接脉字眼也。(翻 3a8-3b1)

(21) me : 着字。在字尾聯用。乃結上接下。将然未然之語。句中或有連用幾 me 字者。義並同。總皆斷然煞不得。(助 10a6-10b1)

f) 連用法先行形：先行する動作 [～して (から)]

(22) fi : 與 me 字。語氣相似而實不同。me 者一事而意相連。fi 者一事說完。語氣未斷。下復更端。(翻 3b4)

(23) fi : 上半句的了字。又因字意。在字尾聯用。乃結上接下。将然已然。詞義未斷之語。句中亦有連用幾 fi 字者。義並同。總為半句。斷煞不得。(助 16b3-4)

名詞格語尾の場合と異なり、動詞活用語尾に対しては、「～語」あるいは「～詞」として文法的意味が記され、「已然」、「未然」、「将然」等を術語として用いつつ、実質的にテンスとアスペクトを解説している。これは、中国語の側に相当する表現が存在しないために、概念のレベルから記述せざるを得なかったためと考えられる。

#### 4. 例示の体系性

『清文啓蒙・清文助語虚字』では、満洲語の用例を示した部分に一定の体系性が認められる。連体法過去形語尾 -ka, -ha, -ko, -ho, -ke, -he の項目<sup>14</sup>、及び連体法未来形語尾 -ra, -re, -ro の項目は以下の通り：

(24) ka. ha. ko. ho. ke. he 此六字俱是。了字。矣字。也字。在字尾聯用。乃已然之詞。句中亦有解作之字。的字者。俱隨上字押韻用之。如上用 a 下用 ha 上用 e 下用 he 上用 o 下用 ho 上用 ha 下用 ka 上用 ge 下用 ke 上用 fo 下用 ko。

alambi. [告げる] 告訴。alaha [了字]. [告げた] 告訴了。

erembi. [望む] 指望。erehe [了字]. [望んだ] 指望着了。

obombi. [洗う] 洗。oboho [了字]. [洗った] 洗了。

hafumbi. [伝える] 通達。hafuka [了字]. [伝えた] 通達了。

gerembi. [明ける] 天亮。gereke [了字]. [明けた] 天亮了。

<sup>14</sup> 満洲語における母音調和 (vowel harmony) は、男性母音 a, o, ū と女性母音 e が同一の単語内で共存しないというのが原則である (中性母音 i, u はどちらとも共存できる)。接尾辞や語尾の中には、付加される語幹の母音に応じて a~e~o の交替形を持つ。子音は h 系が基本形式であるが、一部の動詞は k 系を取ることもある。



fodorombi. [逆立つ] 毛倒捲。fodoroko [了字]. [逆立った] 毛倒捲了。(助 18a3-18b3)

(25) ra. re. ro 此三字俱在字尾聯用。乃上接下。未然之語。亦可煞尾用。比 mbi 字。語氣輕活。句中亦有解作之字。的字符。俱隨上字。押韻用之。如上用 a 下用 ra 上用 e 下用 re 上用 o 下用 ro。如云。

bi urunakū anambi. [私は必ず押す] 我必定推。

bi uthai anara. [私はすぐに押す] 我就推呀。

bi urunakū erimbi. [私は必ず掃除する] 我必然掃。

bi uthai erire. [私はすぐに掃除する] 我就掃呀。

bi urunakū obonombi. [私は必ず洗いに行く] 我必定去洗。

bi uthai obonoro. [私はすぐに洗いに行く] 我就去洗啊。(助 22a5-22b5)

上の二例は、いずれも終止法現在形 -mbi を対照させて例示しており、いわば -mbi を無標 (unmarked) な形、-ha/-he/-ho, -ka/-ke/-ko 及び -ra/-re/-ro を有標 (marked) な形として扱っていることが見て取れる。

なお、『清書指南・翻清虚字講約』においてもこうした記述態度の萌芽が認められるが、希求法命令形 (ゼロ語尾) 及び -mbi との簡単な対照例を示すにとどまり、体系的に例を配置しているとは言えない：

(26) ka. ha. ke. he. ko. ho. 此六字。皆已然之詞。漢文矣字。也字。…如去曰。gene. [行け] 去了。曰。genehe. [行った] …完曰。waji. [終われ] 完矣曰。wajiha. [終わった] (翻 3a3-6)

(27) ra. re. ro. 此三字。用於字末。皆承上接下。將然未然之語。…如用於字末。作結句者。比 mbi 字稍活動些。如我必去。曰。bi urunakū genembi. [私は必ず行く] 如我去。曰。bi genere. [私は行く] (翻 2b2-8)

また、『清文啓蒙・清文助語虚字』における使役/受身形成接尾辞 -bu の項目は以下の通り：

(28) bu. 在字中聯用。如上有 be 字照應。是轉諭使令。教令字。如上有 de 字照應。是被他人字。實解令人給。如云。…凡遇清話字尾。無聯虚字者。是當面使令之詞。如又無 de. be 二字。只有 bu 字者。亦與有 de. be 二字者義並同。

今如當面令人云。si gene [面令]. [君は行け] 你去罷。

如轉諭令人云。terebe genebu [轉令]. [彼を行かせよ] 令他去。

如當面令人云。si yabu [面令]. [君は去れ] 你走罷。

如轉諭令人云。terebe yabubu [轉令]. [彼を去らせよ] 教他走。

如無 de. be 二字云。gisurebumbi [被字轉令]. [言われる/言わせる] 被人説。又令他説。tantabumbi [被字轉令]. [打たれる/打たせる] 被人打。又教人打。(助 50b4-51a5)

上の例では、希求法命令形を対照させて例示するとともに、格の支配に応じた直接命令「面令」と間接命令「轉令」の違い、及び格が表示されない場合の使役と受身の二重性に言及している。

『清書指南・翻清虚字講約』にも同様の記述は見られるが、上に比べて例示は簡略である：

(29) bu. 與字也。用於句中。是使之如此也。又被人如此也。上文有 be 字。作使字用。上文有 de 字。作被字用。如令人行某事。yabubumbi. [行わせる] 令人作某事。arabumbi. [作らせる] 令人喜。urgunjebumbi. [喜ばせる] (翻 7b4-5)

以上の例から見て、『清文啓蒙・清文助語虚字』の方が、『清書指南・翻清虚字講約』に比べて例を体系的に配置しようとする志向が顕著であると言えよう。

## 5. 中国語訳に見られる直訳

『清文啓蒙・清文助語虚字』において「～字」で示される中国語の訳語は、基本的に満洲語の一形態素を中国語の一語に対応させている。与位格語尾 de の項目から中国語訳の部分を摘記すると以下の通り：

- (30) jakade [ときに] 當時字。彼時字。(助 2b2)
- (31) sere jakade [というときに] 説的當時字。(助 2b5)
- (32) ki sere jakade [したいというときに] 欲要的當時字。(助 3a1)
- (33) ojoro jakade [できるときに] 可以的當時字。因為的時侯字。(助 3a4)
- (34) bisire jakade [あるときに] 在的當時字。有的當時字。(助 3b1)
- (35) bisirede [あるときに] 在的時侯字。有的時侯字。(助 3b3)
- (36) serede [というときに] 説的時侯字。(助 3b5)
- (37) ki serede [したいというときに] 欲要的時侯字。(助 4a1)
- (38) ohode [なったときに] 了的時侯字。(助 4a4)
- (39) sere ohode [ということになったときに] 説了的時侯字。(助 4a6)
- (40) ki sere ohode [したいということになったときに] 欲要了的時侯字。(助 4a6)
- (41) bisire ohode [あることになったときに] 有了的時侯字。在了的時侯字。(助 4b1)
- (42) seme ohode [というようになつたときに] 總然了的時侯字。雖然了的時侯字。(助 4b1)
- (43) ki seme ohode [したいというようになつたときに] 欲要了的時侯字。(助 4b2)
- (44) ojoro ohode [できることになつたときに] 因為了的時侯字。可以了的時侯字。(助 4b2)
- (45) sehede [といったときに] 説了的時侯字。倘若時侯字。(助 4b4)
- (46) ki sehede [したいといったときに] : 欲要了的時侯字。(助 4b6)
- (47) bihede [あつたときに] 有來着的時侯字。在來着的時侯字。倘若時侯字。(助 5a1)

以上の中国語訳は、実際には用いられることのない不自然な表現である。上に見られる満洲語

の形態素と中国語の対応関係は概ね次のように帰納され、中国語訳に際してこうした訳語を機械的にはめ込んでいったことが窺える：

jakade=當時；se=説；-re/-ro=的/×；-ki se=欲要；o=可以/因為/×；bi=在/有；  
-de=時候；-he/-ho=了的/來着的

言うまでもなく、満洲語が一単語に複数の形態素を含みうるのに対し、中国語の場合は圧倒的多数が一単語一形態素であるため、満洲語の構造に即した形で訳を記述しようとする限り、このような現象が生じるのは必然である。なお、『清書指南・翻清虚字講約』にはこのような直訳的な現象は見られない。

## 6. おわりに

現存の資料による限り、明代以前には中国語による体系的な非中国語の文法記述が存在しない。清代を通じて刊行され続けた満洲語文法書は、近代以前における中国語母語話者の非中国語に対する文法観を反映する資料と言えるであろう。

初期の満洲語文法書『清書指南・翻清虚字講約』と『清文助語虚字』に見られる文法記述の特色として、次の三点を挙げることができる：

(a) 相対的に名詞の格に関する記述は簡略であり（特に語順に関しては全く言及がない）、動詞の活用に関する記述は詳細である。これは非中国語の文法を記述するにあたって、中国語には存在しない形態論 (morphology) の方が、統語論 (syntax) よりも重要であったことを反映している。なお、動詞の活用に関しては、②『滿漢類書・字尾類』に動詞 gene- [行く] について 97 種の語尾を記した一種の活用表があり<sup>15</sup>、動詞の活用に対する関心の深さが窺われる。

(b) 動詞の活用において文法的意味を記したり、用例を無標/有標の対照で配置したりすることは、体系的な文法記述への志向を反映している。非中国語の文法を記述する場合、「A は B である、また C である」式の訓詁学的思考法では対応できないことが、このような志向を生んだものと思われる。

(c) 各種の語尾に対する中国語訳は、満洲語の一形態素を中国語の一語に対応させるという直訳・逐語訳の発想に基づいている。この発想は、基本的に甲種本『華夷譯語』や『元朝秘史』における傍訳と共通するものである。

上のうち、特に (b) の点は、中国境内に暮らす人間が王引之『經傳釋詞』(1798) 以前に文法を分析的に捉えるという視点を持ち、馬建忠『馬氏文通』(1898) 以前に文法を体系的に捉えるという視点を持っていた可能性を示唆する。中国において 19 世紀末まで近代的な文法観が芽生えなかったとされるのは、中国語母語話者がア priori にそれを生み出し得なかったためではなく、中国語という言語が記述の対象であったためであり、非中国語、ことに中国語と同系でない

<sup>15</sup> 本編については、拙著 (2007) に全文の翻字と解説を収録している。また満洲語文法書のリストで⑦とした『蒙文晰義・蒙文法程』は、ala-「話す」の諸活用形を示したものである。

言語が記述対象となった場合には、先んじてそこに到達することができたのではないかと考えられる。本稿を「文法観の誕生」と名付ける所以である。

<参考文献>

- 池上二良 (1955) 「トゥングース語」, 『世界言語概説』下, 441-488, 東京: 研究社.
- 池上二良 (1962) 「ヨーロッパにある満洲語文献について」, 『東洋學報』45(3), 105-121; 池上二良 (1999) 『満洲語研究』, 359-385, 東京: 汲古書院.
- 今西春秋 (1956) 「清書指南のことなど」, 『ビブリア』7, 8-11.
- 遠藤光暁・竹越孝主編 (2011) 『清代民國漢語文獻目録』, ソウル: 學古房.
- 落合守和 (1984) 「《西域同文志》三合切音の性格」, 『静岡大学教養部研究報告 (人文・社会科学編)』, 19(2), 85-110.
- 落合守和 (1987) 「《満漢字清文啓蒙》に反映された 18 世紀北京方言の音節体系」, 『静岡大学教養部研究報告 (人文・社会科学編)』, 22(2), 111-151.
- 河内良弘 (1996) 『満洲語文語文典』, 京都: 京都大学学術出版会.
- 竹越孝 (2007) 『清代満洲語文法書三種』, KOTONOHA 単刊 1, 愛知: 古代文字資料館.
- 竹越孝 (2011) 「満漢資料概観」, 遠藤光暁・朴在淵・竹越美奈子編『清代民國漢語研究』, 23-29, ソウル: 學古房.
- 竹越孝 (2012) 『兼滿漢語滿洲套話清文啓蒙一翻字・翻訳・索引一』, 神戸市外国語大学研究叢書 49, 神戸: 神戸市外国語大学.
- 竹越孝 (2013) 「『清文啓蒙・兼漢滿洲套話』のテキストとその受容」, 『譯學斗 譯學書』4, 129-147.
- 津曲敏郎 (2002) 『満洲語入門 20 講』, 東京: 大学書林.
- 早田輝洋・寺村政男 (2004) 『大清全書一増補改訂・附満洲語漢語索引一』, 東京: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 山本謙吾 (1955) 「満洲語文語形態論」, 『世界言語概説』下, 489-536. 東京: 研究社.
- 雄松堂 (1966) 『天理図書館所蔵満語文献集・語学編』, 東京: 雄松堂フィルム出版.
- Wylie, A. (1855) *Translation of the Ts'ing Wan K'e Mung, A Chinese Grammar of the Manchu Tartar Language; with Introductory Notes on Manchu Literature*. Shanghai: London Mission Press.
- Möllendorff, P. G. von. (1892) *A Manchu Grammar, with Analyzed Text*, Shanghai: American Presbyterian Mission Press.